

# BCS

PRIZE-WINNING WORKS

BCS賞受賞作品探訪記

25

第二五回受賞作品（一九八四年）

## 京都東急ホテル 後編

前編では、京都東急ホテルが建てられた敷地周辺の歴史や、現在までの使われ方について紹介した。後編では、法規制と客室数などの制約から、建物が「地下二階ロビー型」で設計された経緯と、施工時の連携などについて、設計施工の関係者に振り返っていただいた。

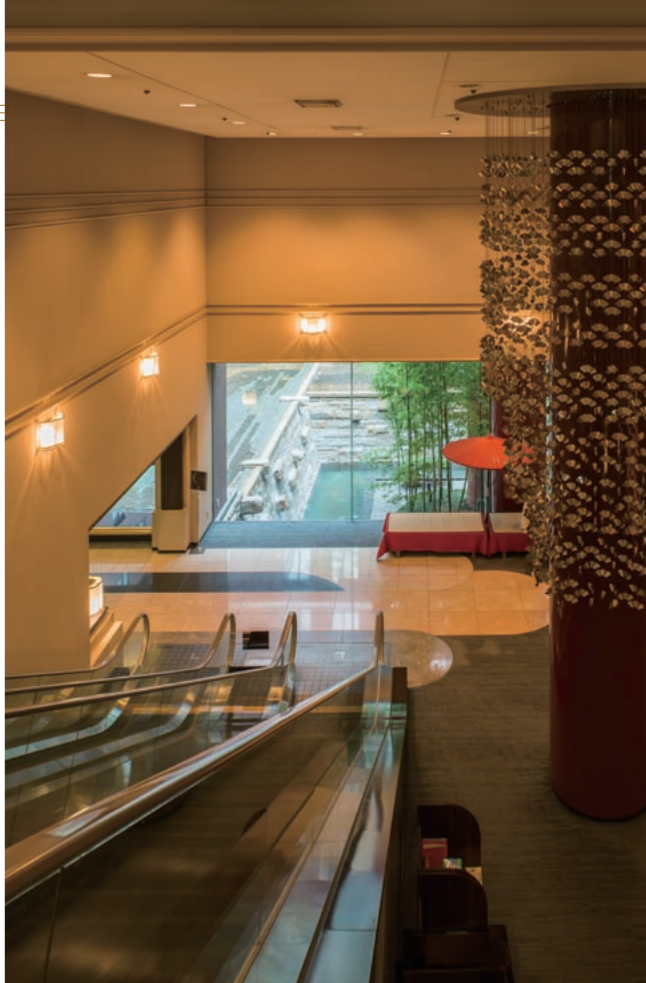
### 不利な条件を逆手にとり、インパクトがある空間を

京都東急ホテルは、戸田建設の設計施工によって建てられた。建築主の東急ホテルチェーン（現・東急ホテルズ）本社が千代田区にあることから、設計は戸田建設本社が、施工は大阪支店が担当し、着工後の監理には大阪支店の設計部も参加して、お互いに協力体制を組んで行われた。このプロジェクトの意匠設計をリードした奈良井俊章氏が当時を振り返る。「東急ホテルチェーンさんが京都に出店するのは初めてでしたし、戸田建設としても京都でしっかりとし

た実績を積みたいという思いがありました」。建築主と建設サイドが一体感をもちながら力を注いだ仕事になったという。

設計当初、建物の骨格を大きく左右する制約に突き当たった。敷地面積は七、二四平方メートル。建築法規によって建物の高さが二〇メートルに制限されたなかで、客室四五〇室を確保するという条件だった。ホテルは一般に一階にエントランスとフロントロビーなどのメインフロアを設け、客室は二階以上に配置するのが定石だが、この敷地条件では無理が生じてしまう。そこで、設計チームが検討を重ね、到達した答えが「地下一階ロビー型」にすることだった。一層分を地下へ下げることによって、地上高さを抑えることができる。実は、単に条件を満たすだけなら、ほかに方法があった。敷地は二つの用途地域に線引きされており、堀川通に面している東側の部分は商業地域、その背後は住宅地域だった。高さ制限は住宅地域が二〇メートル、商業地域が三〇メートル。建物を道路際まで寄せて高くつくれば、定石に近いプ

地下1階メインフロアに設けられたラウンジから中庭を眺める。中庭を介して向かい側はフロントロビー。風景を眺めながら、ほどよい距離感で腰をおろす人たちの視線も行き交う。中庭のテラスは現在、結婚式にも使われている。



エントランスからエスカレーターで地下1階のメインフロアへ向かう。最初に中庭に對面する場所でもある。左手は中庭の水路を渡る橋掛かりのデザインがなされ、そこを渡ってフロントロビーへ向かう。右手はレストラン、ラウンジ、バーへつながっていく。これらが中庭と結びつき落ち着いた雰囲気を出している。

ランも可能となる。しかし、それではいかにも余裕のない印象しか生まれない。設計チームが目指したのは、京都らしさを感じさせ、あらたに一歩踏み込んだインパクトをもつ空間だった。あえて奥まった二〇層制限の場所へ建物を配置して、奥ゆかしい佇まいとしたうえで、不利な条件をクリアしつつ、いかにして利用客の視線に触れるような建物を設計するかに知恵が絞られた。

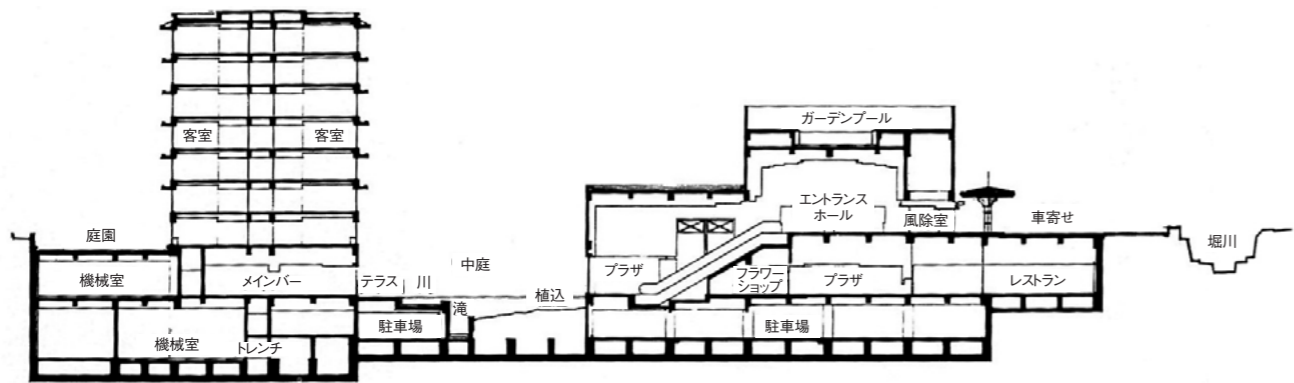
### 水と緑と、堀川の再現がメインテーマに

「地下二階ロビー型にすると同時に、利用者が地下に居るという感覚に陥らないような工夫をする必要があります。そこで、堀川の流れを再現するというイメージが大きな役割を果たすことになりました」と奈良井氏。ホテルが立地する堀川の歴史は平安時代に遡るが、戦後は流れが細くなっていき、一部を残して暗渠にされていった。ちょうどホテル建設が決まった時、目の前でその埋め立てが始まるようになっていた。京都らしさを表現するうえで、この堀川の流れのイメージと、豊かな水と緑、また京町

家を構成する「中庭」などが結びついた。エスカレーターで地下へ斜めに降りていく動線に従って水が配され、それが中庭へつながり、周囲にフロントロビー、ラウンジやレストラン、バーなどのパブリックな施設を配置した。「中庭を介して、視線の行き来を発生させることで閉塞感が薄れ、利用者は自分の存在を意識することが出来る。ホテルに人の賑わいを感じられるようになりす」。それぞれ場所から見える庭の景色の変化も計算したという。「同じものが場所によって違って見えるとか、夜になると水がきらめいて、昼とは違う景色になるとか、飽きが来ないようにデザインしました」。さまざまな手法を駆使して生まれたメインフロアは、地下階にいることをいつのまにか忘れさせる。

### オリジナルの仕上げでデザインの統一を図る

設計施工の連携は内部の仕上げでもうまく働いた。いいものをつくり上げることが念頭に置いて、設計と施工現場のメンバーが意思



東西方向の断面図。図右端から東側の堀川通、宴会場棟、中庭、客室棟。

### 設計者より

## 建主と設計施工が意識を共有する 全員参加型のプロジェクトでした



戸田建設株式会社 建築設計統轄部(当時)

### 奈良井俊章 *Yoshiaki Nara*

設計を担当した時、私はまだ三〇代の前半でした。東急ホテルチェインの担当部署の方々も同年代で、コミュニケーションはとてもしやすいかった。打ち合わせをしているうちに、それまでと一味違った特徴のあるホテルにしたいという気持ちもわかり、お互いに意欲をもって取り組んだ仕事になりました。

施工現場についても、なるべくみんなが一緒にものづくりに参加してもらえようという心がけました。設計の考えを素早く大阪支店に伝え、あちらの意見も早く吸い上げ、互いの合意にもっていく。また、当社の建築工事ももっている経験と技術を發揮してもらおう。例えば、エントランスを入ったところに漆塗りの大きな柱が立っているが、設計側からはこうした希望を伝え、あとは現場責任者にお任せしました。苦労しながらも、楽しそうに進められていた様子が思い出されます。

設計チームで、現場監理を専門に担当してくれるスタッフがいる一方で、私は仕上げを詰めるために飛び回っている状況でした。絨毯から家具調度、壁紙のパターンまでオリジナルでした。職人さんに相談しながら、質のいいものを予算枠内に収める方法を探っていました。このプロジェクトは全員参加型の体制ができたことで、当時の関係者は三〇年以上経った今も、印象深かった仕事として話題にする人が多いようです。

### 施工者より

## 自然を相手にする土工事の段階で初めて増水を経験しました



戸田建設建築工部部(当時)

### 岡部豊 *Yutaka Okabe*

京都東急ホテルの施工期間は一九八一年三月から翌年十月まで一年七カ月。現場は社員が二〇人ほどの体制をとり、当時の私はまだ入社三年目で、着工から竣工まで配属されたのは初めての経験でした。地下工事は、山留壁に「H鋼横矢板工法」を採用して敷地の周囲を抑え、さらに山留壁が崩れるのを防ぐ措置として、地下の面積が広いので、仮設のバックアンカーを隣地側に斜めに打ち込み、山留壁を外側へひきつける方法をとりました。西側の民家などで一

部アンカーの打ち込みの了解を得られなかった場所については、内側から斜め材でつばる鉄砲梁を設けました。切梁は信頼性は高いのですが、邪魔になって躯体工事がしにくい欠点があります。その点、アンカーなら敷地の上部がオープンで、地下工事がしやすくなります。

しかし、地下工事の時期が、ちょうど雨の降りやすい時期だったので、一度に降った量が多かったりして、揚水ポンプによる排水が追い付かず、深いところは胸まで水に浸ったこともありました。急な増水によって地下水が一晩で上がるという状況でした。時間がたてば排水されるのですが、工事に支障が出ないよう、大工さんたちと仮設のコンクリート型枠をチエックした覚えがあります。地下工事が自然環境によっていかに影響されるかを初めて知った貴重な現場となりました。



中庭の西側、バーカウンターからフロントロビーへ通じる場所。開口は地窓のように低く抑えられている。場所によって眺めが変化するように設えられている。

の共有を図った。奈良井氏は「図面を見ればわかるという一方的な流れ作業にはしたくなかった」と言う。「完成予想を描いたパネルを何種類もつくり、現場で全員を集めて、こういうものにしたんだと、かなり力を入れて説明をしていました」。

当時、大阪支店建築工事に所属し、入社三年目だった岡部豊氏は、ラウンジやレストランの楕円形の天井吹抜けなどで、曲面を描く壁の仕上がり精度を上げるように、しっかりと説明を受けたことを記憶している。「曲面が交わって線が出る部分を、ピシッと出すことが重要だと伝達されました。そこがきれいにできていないと、ほかの部分もきれいにつくっても、

いい雰囲気が出せませんから」。岡部氏はそれを意識して、仕上げ面の位置出しを指示する工程などに臨んでいたという。

設計の意思が伝わることで、現場サイドからの提案も生まれ、成果をあげた。例えば、宴会場の華やかなシャンデリアは、シャンデリアというカテゴリで照明メーカーに注文すると高額であるため、金属板を曲げ加工し、シンプルな光源と組み合わせる施工すれば合理的にできるという現場の提言をもとにできあがった。また、京都らしさの表現は桃山風をイメージしながら、具象的になりすぎないようにデザインを効かせたもので、製作には伝統的な技術も随所に生かされた。金沢の金箔細工専門店



竣工当時のラウンジ。天井が楕円形に吹き抜け、2つの曲面が交差している。(提供：戸田建設(株))

や、京都の織物会社と築いていた信頼関係により、エレベーター扉に襦袢文様を施し、「洛中洛外図屏風」の雲をイメージした絨毯などが製作された。さらに奈良井氏は家具調度やテナント飲食店の内装にも関わり、ホテル全体のデザインの一貫感をつくりあげた。そうした開業当時の内装は、時代の変化とともに改装されてきたが、地下一階のエスカレーター正面で、ミドルエイジの人々が中庭の風景をバックに記念撮影をする姿は長年変わっていない。中庭とつながる共有空間の印象深いあり方は利用者にとっても、現在まで記憶に残るホテルであり続けている。



エレベーターの扉は、装飾の金箔を金沢で貼ったもの。開業当時から変わっていない。機械設備の部分は定期的に更新されるが、美しい仕上げは大切に引き継がれている。